

寮 目下、理論武装中

約二カ月もの間、新寮闘争委員（吉野厚生委員長）によって単独入寮が繰り返され、長かった夏眠の眠りから目を覚まし、新たな夏期を迎えようとしている。

夏休み明けの十月を前にして、大学の授業再開の動きいかに、より何らかの対応策が講ぜられ

な期間を要するであろう。

「あくまで、自衛隊から要求している理由のみに基づく選挙の三時間（二部は一時間）以内の選挙可能者を除く選挙の結果については大学側に報告すること大学の憲法に違反しない」として話し合おうとする。以上四条件は「入寮」と強者の立場に対し、新寮闘争は「当局の近代化自主路線に対し、はつきりとした位置付けを成し、さらには、われわれが提出した六項目に近き取捨を計ることする当局の論議構造を組み込まれないようにしなければならない」と、徹底して対決の構えを見せることに平行して、一部三寮（生田・中山・和泉）による理論合戦が二十八日の二回日に行われ、千葉で行なう計画もあり、新寮闘争側は、目下のところ、理論武装中」といった様相を呈している。

幕野区の堀切のこの新寮は、以前と変わることなく、電気・ガス・電話はストップのまま。今のところ四人程が入寮している。闘争の過程で、以前まで比較的に「薄かった赤羽寮も」十月に入っている状況分析をした後、態勢が出来次第、諸権利に関して当局と闘う」と、寮問題に意気込みを見せ始めた。

新寮闘争としては、「十一月への動きに追随出来ず、寮自体の大衆的行動はわれなかった」としながらも、個々の問題については、当局との交渉は欠かさない方針という。

新たな寮生募集も、各自治会単位で行なっており、一層、寮生独自の管理・運営の拡大を図りつつある。

「入寮占拠は根本的に認められない」とする当局も、これといった具体的な行動は今のところ表面化するに至らないが、一応、以前からの筋は通す公算が強く、はつきりとした両者の歩みよりは見せていないのが現状といえよう。

四条件要求に固執し続ける「闘争」は、それは自治権の侵害と認められる新寮闘争、その闘争は争いにも強い。あふれる学生に、足りない寮。わずか一〇〇名収容の寮だが、本心に学生が安心して住める日はいつの日だろう。

農実稼助手が声明

機動隊導入による授業再開に反対する。

大学立法の暴力的国会通過により、法廷意図の一つである情喝に便乗し、学生の提起した問題を何ら根本的に理解しようせず、主体的に答え自らの過去責務を含めて改めず、依然として旧態のままを維持するかの如く、機動隊導入によって、大学業務の再開を果した結果たそうとしている大学が多々見受けられる。かかる行為は紛争の原因を追求し、究明解決して行く努力を自ら放棄する行為としか言えない。

本学においても上層部において今月中、下旬に機動隊を導入するといふ話がある。われわれは今般かような状況を警戒し、真摯に学生らの提起した問題に取り組む。抜本的改革に努力され大学立法を先取りする形において、解決されることは断じて反対であり、大学立法は紛争の対象ではないことをここに声明するものである。

九月六日

農学部実験助手有志